

情報公開文書

| | |
|-------------------------------------|---|
| 研究の名称 | 消化器癌に対する個別化医療がもたらす影響についての解析 |
| 整理番号 | |
| 研究機関の名称 | 富山大学附属病院 |
| 研究責任者 (所属・氏名) | 消化器・腫瘍・総合外科 藤井 努 |
| 研究の概要 | <p>【研究対象者】 2019年1月から2025年12月31日までに当院で、食道癌、胃癌、大腸癌、肝臓癌、胆道癌、膵臓癌の治療を受けた方。</p> <p>【研究の目的・意義】 従来の外科的治療、放射線治療、札細胞性抗癌剤などの化学療法に加え、分子標的薬の登場により、現在の癌診療は多岐にわたります。そのため治療法の選択が重要となります。癌診療において、がんゲノム情報に基づいた個別化医療が世界的な標準治療となりつつあります。本邦においても、2019年6月に保険収載され、条件を満たした患者において保険診療としてがん遺伝子パネル検査が実施できるようになりました。これにより、癌診療において個別化医療が重要となってきています。</p> <p>とくにがんゲノム検査にもとづく薬物や、免疫チェックポイント阻害剤（ICI）により原発巣の著名な縮小、ときには clinical complete response (cCR)となる症例を経験します。これまでの集学的治療において、とくに治療開始時に切除不能癌の場合に、術前治療（化学療法や化学放射線療法）、conversion surgery、術後化学療法といった治療戦略が選択させることがあります。外科病理が主体をなす TNM 分類では cCR を獲得したような症例を分類することが困難であり、また CR 症例における外科的切除の意義を再検討する必要があると考えられます。</p> <p>今回の研究において、消化器癌においてとくにがんゲノム情報に基づく薬物や ICI といった新規抗癌剤を選択した症例の治療効果を明らかにするとともに、conversion surgery を施行した症例の臨床病理学的評価および予後を評価し、外科的治療の意義を明らかとすることを目的としています。</p> <p>【研究の方法】 2017年1月から2025年12月31日までに当院においてがんゲノムに関する検査を受けた方を対象として、従来の治療を実施された方と比較した治療成績の有効性に関して、後方視的に検討します。</p> <p>【研究期間】 実施許可日 ~ 2030年12月31日</p> <p>【研究結果の公表の方法】 学会発表および学術雑誌への掲載により公表します。</p> |
| 研究に用いる試料・情報の項目と利用方法 (他機関への提供の有無) | 本研究で用いる情報はカルテから、臨床所見、手術所見、術後経過、生存期間などの情報を抽出し統計学的な解析を行います。また他機関への情報の提供はありません。 |
| 研究に用いる試料・情報 | 富山大学附属病院 |

| | |
|-------------------------------|--|
| 報を利用する機関及び施設責任者氏名 | 病院長 林 篤志 |
| 研究資料の開示 | 研究対象者、親族等関係者のご希望により、他の研究対象者等の個人情報及び知的財産の保護等に支障がない範囲内で研究計画書等の研究に関する資料を開示いたします。 |
| 試料・情報の管理責任者（研究主機関における研究責任者氏名） | 富山大学 消化器・腫瘍・総合外科 藤井 努 |
| 研究対象者、親族等関係者からの相談等への対応窓口 | 研究対象者からの除外（試料・情報の利用または他機関への提供の停止を含む）を希望する場合の申し出、研究資料の開示希望及び個人情報の取り扱いに関する相談等について下記の窓口で対応いたします。 電話 076-434-7331 FAX 076-434-5043 E-mail hrnkths@med.u-toyama.ac.jp 担当者所属・氏名 消化器・腫瘍・総合外科 平野勝久 |